

ナビゲーション型野外活動の教育効果



ウォークラリーを自然の中で行うと、どのような教育効果が得られるのか？ ～行動データから見る教育効果～

●ウォークラリーを行うことで得られる効果

- 1 自然に親しむ態度の育成
- 2 仲間づくり
- 3 問題解決能力の育成
- 4 困難なことを克服する力の育成

これらは、他のナビゲーション型野外活動でも、期待できる効果です。

●ナビゲーション型野外活動の課題

- 1 同じコースを歩いていても、うまく進むことができるグループがある一方、道を間違えたり、分裂したりするグループもあります。グループ内のコミュニケーションを中心とした人間関係が、グループの行動決定に影響を与えています。
- 2 指導者が子供たちと接する機会は、活動前、コース上のチェックポイント及び、活動後と、限られています。そのため、指導者による活動中のグループの状態把握や調整が難しくなります。
- 3 これらにより、グループごとに得られる教育効果に違いが生じます。

●得られる教育効果の検証

まず、ウォークラリーを行う子供たちが、ルート上でどう行動するか記録しました。GPS ロガーを用い、ルート上の分岐点での停止や通過速度、ルート選択の試行錯誤の様子等から、子供たちの行動の詳細を定量的に把握しました。また、質問紙を用いて教育効果についても測定しました。これらのデータをグループ別に検証したところ、ウォークラリー中の子供たちの行動が、教育効果について影響を与えていることが分かりました。

●子供たちの行動記録から分かったこと

活動中にグループがどのように行動したかと、教育効果については、次のような関連があることが分かりました。

- 1 ルートを探す際、やみくもに動かさず、立ち止まってルートを検討し、無駄な行き来が少なく行動できたグループでは、活動に対する肯定的な評価が高まる傾向があります。
- 2 ルートを検討したものの、実際には道を間違えてしまうことを繰

り返したり、グループ内の意見がまとまらなかったりなど、うまくいかない場面が多かったグループでは、活動に対する評価が否定的になりやすい傾向があります。

- 3 立ち止まることや、ルート上を行き来することが少なく、一見してスムーズに行動していたグループでは、活動に対する肯定的な評価が、必ずしも高いとは言えないことがあります。

この場合、グループにとってコースが簡単すぎたり、グループの誰か一人だけが先導したりしていた可能性が考えられます。

●教育効果が高まるポイント

以下の条件がそろうと、子供たちの活動に対する肯定的な評価が高まる可能性があります。

- 1 ルートを選択する過程で、子供たちが適度に苦労しつつ、上手くできた経験を積み重ねられること。
- 2 グループ内のやり取りが活発になるメンバー構成であること。
- 3 子供のたちの実態に合わせた、少しだけチャレンジングな距離のコースであること。

解説

ナビゲーション

ナビゲーションとは、未知の目的地に向かう行為です。ナビゲーションには、地図とコンパスを使います。それらを適切に使いこなし、ナビゲーションする技能をナビゲーションスキルと言います。

ナビゲーションスポーツ

ナビゲーションスキルを駆使して自然の中で実施するスポーツを総称し、ナビゲーションスポーツと言います。ナビゲーションスポーツには、オリエンテーリング、ロゲイニング、マウンテンマラソンなどがあり、世界選手権が開かれる種目もあります。



ウォークラリーで発生する道迷いにおいて、子供たちの行動が原因となる要因

1 コマ図の読み取り方法の習得不足

子供たちが、コマ図の読み取り方法を理解できていない場合、適切なルートを選ぶことができないことがあります。

2 道間違いに気が付かない

仲間同士で話し込んでしまったり、周囲の景色等に夢中になったりして、コマ図の確認を忘れ、道間違いに気が付かないまま、誤ったルートを進み続けてしまうことがあります。

3 道を間違っているかもしれないが、せっかく歩いてきた道に戻ることをためらう

道間違いの可能性がある場合、進むべきルートが分かっていない場所まで戻る必要があります。ところが、道間違いに気づいた時に、「せっかく歩いてきた道に戻りたくない」という気持ちが働くことがあります。その結果、誤った道を進み続け、適切なルートから大幅に外れてしまうことがあります。

4 昼食場所、トイレ、指導者ポイントにおける道間違い

昼食やトイレ休憩の後、指導者がいるポイントを通り過ぎた直後等に、誤ったルートを進んでしまうことがあります。このような場面では、子供たちが安心感から気が緩み、ルート維持に対する意識が散漫になっている可能性があります。

5 グループの集合・分裂

もめ事が原因でグループが分裂したり、歩いているうちに他のグループと混ざったりすると、道間違いに対する注意が散漫になり、正しいルート維持が困難になり、道迷いが発生しやすくなります。

6 疲労

疲労がたまってくると、正常な思考ができなくなり、コマ図の確認がおろそかになって、道間違いが発生しやすくなります。疲労は、子供にとって長い時間、長い距離を歩くことでたまりやすくなります。ほかにも、グループ内でのいさかいなどが原因で疲労することもあります。

ウォークラリーなどのナビゲーション型野外活動は、これらの要因をできる限り減らしていくことで、より安全にかつ効果的に実施できます。

解説

ナビゲーション型野外活動

野外活動(野外教育)において、指導者に引率されて行う活動と異なり、参加者自らが進路を判断、選択しながら行う活動の総称で、グループ単位で実施されることが一般的です。

ナビゲーション型野外活動には、オリエンテーリング、ロゲイニング、ウォークラリー、ハイキングなどが含まれます。

ウォークラリー

ウォークラリーは、コマ図と呼ばれるコース図に従い、課題を解決しながらグループで歩き、時間得点と課題得点の合計点を競う野外ゲーム(日本レクリエーション協会ウォークラリー委員会、1985)で、仲間とともに協力し、自然と触れ合い、楽しみながら充実感を得ることが期待できる(渡邊、1999)とされています。

日本レクリエーション協会を中心に普及し、現在、野外活動を提供する全国の青少年教育施設の多くに、常設コースが開設されています。オリエンテーリングに比べ

専門的な知識や用具を必要とせず、導入しやすい活動とされています。

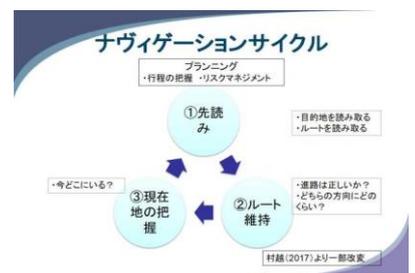
ウォークラリーは、静岡県立三ヶ日青年の家で考案されました。

ナビゲーションサイクル

自然の中を歩く活動では、未知の目的地に進むため、不確実性のある自然環境下で地図を読み、現在地を把握し、進路を決め、正しい道に進む必要があります。

そのため、地図からルートを読み、予定した正しいルート上にいるか(ルート維持)、今どこにいるのか(現在地の把握)を、確認し続けることが必要です。

この一連の行為を「ナビゲーションサイクル」と言います。



ナビゲーション型野外活動の教育効果をより高めるために。

準備段階のポイント

1 目的と参加者の実態に合わせたコースを選択する

活動の目的と、実際に活動する人たちの実態（年齢、性別、体力、人数や、集団のまとまり具合等）に合った活動かどうか、指導者が実際に活動してみると（下見）で確認し、コースを決定します。

2 指導者の配置計画を作成する

必要に応じ、コース上の危険箇所や道に迷いやすいポイントに指導者を配置します。指導者が立つポイントは、参加者の様子を確認できる場所でもあるので、そこで参加者を観察する視点や、必ず伝えたいことなどを、あらかじめ整理しておきます。

3 グループの状態を予測する

活動は、5～6人程度の小グループで行うと良いです。設定したグループで活動した場合に、どのようなことが起きそうか、グループごとの見立てがあると、当日の指導がしやすくなります。

4 事前練習をする

可能であれば、学校の周辺等でミニコースを設定し、事前に練習すると良いです。参加者が、地図やコマ図の読み取り方、活動のルール、グループ内での相談の仕方などに慣れることで、当日の活動がスムーズに行えます。

活動実施時のポイント

1 活動の実施判断をする

必ずしも、雨が降ったら活動できないということではありません。それでも、活動の効果は、天候や参加者の体調等に影響されます。状況を良く確認し、冷静に実施判断を行います。

2 ルールを丁寧に確認する

スタートする前に、活動のルール、地図やコマ図の読み取り方を確認します。また、必ずグループで行動し、協力し合う必要があることを伝えます。参加者が活動についてよく理解して取り組むことができるよう、工夫します。

3 参加者の様子を確認し、必要に応じて調整する

チェックポイントやコース巡回では、あらかじめ準備した計画や予測に従い、参加者の様子をよく観察します。グループに課題があると思われる場合は、必要に応じ、その課題について指摘して考えてもらったり、アドバイスしたりします。グループを支えるために頑張っている参加者をねぎらうことも、大切なポイントです。



活動に際し参加者に伝えるポイント

1 一人一人が考えること

誰か一人がコースを決めて進むのではなく、グループの一人一人が考え、意見を出し合い、全員で決めることが大切です。各自に地図やコマ図を1枚ずつ配付することが、主体的な参加に結び付きます。

2 必ずグループで行動すること

ナビゲーション型野外活動は、協力することについて学び、仲間との関係をより深める機会となり得る体験活動です。

みんなで決めたコースを進み、道を間違えたら考え、やり直し、新たなルートを試みます。もめ事が起きても、メンバーがはぐれることなく、全員でゴールすることが大切です。

協力することや信頼するとはどういうことかについて、事前に考える機会があると良いかもしれません。

3 地図やコマ図を丁寧に確認すること

ルートの分岐で立ち止まり、この先のルートを検討して、正規のルートが大きく外さないことが大切です。また、地図やコマ図の情報と、目に見える風景を組み合わせ、必要な情報を取り出して進路を決め、維持することも欠かせません。

地図やコマ図からルートの情報を適切に読み取れると、進路決定がスムーズになり、結果として道迷いが起きにくくなります。

活動後の振り返りポイント

体験活動では、感じたこと、理解したこと、分からなかったことなど、体験をとおした学びについて、参加者がまとめる振り返りの時間を持つことが大切です。個人、グループそれぞれの振り返り時間を持つと、よりよいでしょう。

1 具体的に聞く

振り返りでは、印象に残ったこと、楽しかったこと、嬉しかったことに加えて、がっかりしたこと、大変だったこと、失敗やうまくいかなかったと感じた経験等についても、そう感じた理由を含めて聞きます。

2 どのような意見も肯定的に捉える

体験活動での学びは、参加者によって全て違うことが特徴であり、魅力です。その時には否定的な感想でも、時間を経て良い経験として残る場合もあります。

指導者は、参加者の言葉を常に肯定的に受け入れようとする姿勢を持つと良いでしょう。

3 今後の成長につながる事柄を丁寧に検討する

失敗やうまくいかなかったと感じたことについては、なぜそうなったのか、どう取り組んだらうまくいくか、グループ内で検討する時間があると良いでしょう。また、結果が納得いくものでなくても、取り組んでみたこと自体に意味があり、頑張ろうとしたことが素晴らしいということ、指導者が明確に伝えることも、とても重要です。

ナビゲーション型野外活動の安全管理と教育効果の研究

朝霧野外活動センターでは平成 29 年から令和 4 年度まで、静岡大学教育学部村越研究室と共同で、子供たちのウォークラリー中の道迷いを含む安全管理と、教育効果に関わる調査、研究を行いました。この調査、研究をとおして分かったことを、利用団体に提供する野外活動プログラムや、主催事業で実施するプログラム等に反映させ、活用しています。

GPS ロガーを用いた道迷い把握と、コマ図の修正

(小西岳勝他、(2019)：コマ図の修正によるウォークラリーコースの改善、日本野外教育学会 第 22 回大会プログラム・研究発表抄録集)
利用団体の協力を得て、ウォークラリーに参加する子供たちに GPS ロガーを持ってもらい、行動したルートから道迷い発生箇所を特定しました。その結果、コマ図の作成方法が規定に合っていないコマ図が、道迷いを誘発することが明らかになりました。コマ図を修正することで、実際に道迷いの発生が減少することが確認できました。さらに、周囲の環境や、子供たちの行動特性から道迷いが発生しやすいポイントや行動がわかりました。

ウォークラリー中の行動が、参加者の活動の自己評価に与える影響

(小西岳勝他、(2020)：ウォークラリー中の行動が、参加者の活動の自己評価に与える影響、日本野外教育学会第 23 回大会プログラム・研究発表抄録集)

利用団体の協力を得て収集した行動データを分析し、分岐上での停止や通過速度、ルート上の試行錯誤の様子から、行動の詳細を定量的に把握しました。行動データと、質問紙を用いた教育効果測定をグループ別に検証した結果、ウォークラリー中の行動が教育効果の学び方に影響を与えていることがわかりました。

参考文献

- 渡邊佳洋「ウォークラリー」（社団法人日本キャンプ協会編『キャンプディレクター養成キャンプ専門科目テキスト』社団法人日本キャンプ協会、1999 年）
- 財団法人日本レクリエーション協会『REC 増刊 40 号 ゼロから始めるウォークラリー～ウォークラリー大会の開き方～』（財団法人日本レクリエーション協会、2003 年）
- 村越真、宮内佐季子「山岳読図ナビゲーション大全」（株式会社山と溪谷社、2017 年）
- 公益社団法人日本オリエンテーリング協会資格認定委員会「ナビゲーション・インストラクターハンドブック第 2 版」（公益社団法人日本オリエンテーリング協会、2021 年）

解説

ナビゲーション型野外活動の一例

オリエンテーリング

山野に設定されたコントロールを地図とコンパスを使ってまわり、ゴールまでの所要時間を競う個人スポーツです。全国に常設コースがあり、野外活動として利用でき、ハイキング感覚で里山歩きを楽しむこともできます。

ロゲイニング（フォトロゲイニング）

オリエンテーリングのルールを元に作られたスポーツで、オリエンテーリングより広範囲なエリアを使用し、制限時間を長く設定します。2～5 人のグループで、制限時間内にポイントをどれだけ巡ることができるかを競います。

登山、ハイキング（指導者が引率しない場合）

あらかじめ決められたコースを、地図、標識、指導者が立つポイントなどを用い、参加者だけで歩くプログラムです。引率される場合に比べて、自主性や協調性等がより養われるといわれています。



朝霧ナビゲーションパーク構想

ナビゲーションスキルは、自然環境下で、目的地に安全にたどり着くために必要な技能です。活動プログラムとして実施する場合、それ自体が楽しく、魅力的です。また、自然環境に潜む危険に気づき、適切に対処するリスクマネジメント(安全マネジメント)の技能を身に付けることもでき、野外活動には欠かせないスキルです。

日本キャンプ協会グループが指定管理者として施設を運営する朝霧野外活動センターでは、多くの人にナビゲーションの魅力伝え、朝霧高原を、いつでも誰でもナビゲーションスポーツを楽しめる場所にしようと、平成 27 年度に「朝霧ナビゲーションパーク構想」を策定しました。この構想に基づき、様々なナビゲーションスポーツのイベントを開催したり、利用団体に提供する新しいナビゲーション型野外活動を開発、導入したりしています。また、ナビゲーションでしばしば起こる「道迷い」のメカニズムなどについて調査し、その成果を活動に反映し、より安全な活動が実施できるよう取り組んでいます。

主催事業

朝霧マウンテンオリエンテーリング
オリエンテーリング in 朝霧
朝霧ロゲイニング
初めてのナビゲーションスポーツ
富士山麓ロゲイニング
野外教育指導者養成講習会

活動プログラム

スコアオリエンテーリング
ミニロゲイニング
フォトリエンテーリング
フォトロゲイニング®
ハイキング
フォトレイニング
朝霧大冒険
ウォークラリー
フォトラリー
ラビリンスオリエンテーリング

静岡県立朝霧野外活動センター（指定管理者日本キャンプ協会グループ）

〒418-0101 静岡県富士宮市根原 1 番地

TEL 0544-52-0322 FAX 0544-52-0320

Mail asagiri@camping.or.jp URL <http://asagiri.camping.or.jp/>